

デフワールドカップ出場を目指し
世界で戦うための技術を磨く





ウズベキスタン戦

4月23日から5月6日にかけて韓国で開催されたアジア太平洋ろう者サッカー選手権大会に、都城泉ヶ丘高等学校3年の渡邊諒太郎さんが日本代表選手として出場しました。本大会で日本代表は2位に輝き、2020年に行われるデフサッカーワールドカップへの出場権を見事獲得しました。

ろう者サッカー(デフサッカー)は、聴覚に障がいのある人が行うサッカーで、競技中は補聴器を外すことがルールとして定められています。

smiling faces of miyakonojo

人の風景

渡邊さんは、ウズベキスタン戦やマレーシア戦に出場。フォワードとして活躍しました。日本代表合宿への参加が決まった当時、周りからの応援と期待に応えることができるか不安があった渡邊さん。「他の代表選手からプラス思考で競技しよう」と声を掛けてもらった。試合前も緊張していたが、その言葉のおかげで緊張が解け、がむしゃらにがんばれた」と振り返ります。経験を積んだ大学生や社会人の代表選手たちとの技術の差や、世界の選手との体格の違いなどを大会で痛感した渡邊さんは「世界レベルのプレーの中で、戦う際の課題を見つけるいいきっかけになった」と話します。

母親の勧めで小学1年生のときに地元の姫城FC(フットボールクラブ)に所属。その後、セレンソ都城FCに所属し、現在は同校サッカー部で技術を磨いています。

審判が笛ではなく旗を使用するデフサッカー。「デフサッカーの方が、よりアイコンタクトなどのコミュニケーションが重要になる。チームメイトと密に連携を取ることで、競技しやすくなる」と渡邊さん。

ボールコントロールの質を高め、日本代表の植松隼人監督が重要視する

「がんさつりょく眼察力」を養いたいと意気込む渡邊さんは、2020年のデフサッカーワールドカップの代表入りに向けて、努力を惜しみません。そして、高校3年生の渡邊さんは「勉強とサッカーを両立し、将来は自分と同じように障がいのある子どもたちの教育に携わる仕事になりたい」と目を輝かせていました。

アジア太平洋ろう者サッカー選手権大会 日本代表

渡邊 諒太郎さん

(都城泉ヶ丘高等学校3年)

